

私は、金箔の総合メーカーの(株)箔一の創業者、浅野邦子と申します。事業をはじめた昭和48年、まだ素材であった金箔を技術開発により、工芸品・食用金箔・建築・化粧品・など多方面に展開、金沢箔のブランドを構築しました。前例にないことに取り組んだ結果、石川県の地場産業にまでに育てあげることができました。当時、女性の社長など殆どおらず、男社会で因習や慣習の深い業界や経済界や地方の行政を変えることは並大抵ではありませんでしたが、社会で認知していただくには男性以上の努力が必要でした。

資金・技術・情報・社員も何もなく、金箔など見たこともない、文字通り「使命感」からのスタートでした。技術・販売・経理・マネージメントを自分の能力の無知に自分を励まし、おかげさまで今日の会社に成長いたしました。

私がこれまで仕事をしてきた中で一番感じていたのは家庭と仕事の両立の難しさ。特に子供を置いての仕事や出張が一番辛いものでした。この問題は、現代も子育て中の保護者には付きまとう課題です。男社会での厳しさに打ち勝つ精神力や忍耐力が必要で、私は、社会における屈辱感があったからこそ、成功できたのだと思っています。

現在60歳以上の女性は「鬼世代」であらゆることに勝ち続けることで生き抜いてきた世代で、自分自身にも厳しく、男性社会の中で自助努力で勝ちぬいて自らを輝かせてきた時代でした。

50歳以上は「キャリアウーマンの世代」で、能力やバイタリティーがきわめて高く、プライベートを犠牲にして大企業の役員や管理職まで登りつめるなど、男性のトップマネージメントともうまく付き合い、自己実現を勝ち取った世代。

30から40歳代は「ワークライフバランス」を重視し、自己実現を図ることを重視する女性が多い世代。

私が経団連の審議委員会の副議長に就任した時に提言したのが「女性省の設立」でした。女性の心身の健康や働く環境の整備や充実こそ真の輝く社会女性が確立できると思います。現在は内閣府の男女参画局の中に「・・・」という部署があり、独自の権限は薄いです。局から省へ格上げすることにより、女性の社会進出に関する施策の権限を一本化して効率的に進めていくためにも必要です。世

界にはカナダ・ドイツ・オーストラリア・韓国その他、さまざまな国に女性省に当たる政府組織があります。日本ではまだその重要性が認められておらず、その点でも日本は遅れているといえます。

重要なのは「結果の平等」ではなく「機会の平等」が与えられることが重要なのです。この日本女性財団の発足は、女性が生き生きと輝いて社会に参画する女性をサポートするための大きな役割を持っています。

女性の生涯健康をトータルで支える日本女性財団にご賛同いただき、私たちと共働していただくよう、皆様のご協力をお願いいたします。